

## 聴覚障害幼児のコミュニケーション行動の発達(1)

藤田 和加\* 草薙 進郎\*\*

1～2歳の聴覚障害児の、教師の集団指導における母子相互交渉場面の「コミュニケーション行動」を録音・録画し、分析を行った。その結果、対象児それぞれ、個人差がみられた。また、全体的な発達の特徴が明らかにされた。特に(1)「自発コミュニケーション行動」と「対応コミュニケーション行動」の両方において、母親が「対面」の態度で伝達手段を豊かに工夫して使えば使うほど、その子供も質的、量的に「コミュニケーション行動」を豊かに拡充する現象がみられ、(2)1歳児は、身体面・運動面の発達に伴い、活動範囲が広がるにつれて、母子相互交渉の質的、量的側面を豊かに拡充させていったことが明らかにされた。このことから、伝達手段の面と相互交渉の態度の面における母親の「コミュニケーション行動」の質的、量的特徴の重要性、及びこれらと関連する子供の運動能力、環境への理解能力への影響が考察された。

キーワード：聴覚障害児 コミュニケーション コミュニケーション機能 手段 相互交渉

### I. 問題の所在

聴覚障害幼児は、聴覚に障害を有するが故に、コミュニケーション能力、言語能力の獲得にハンディキャップを負っているという事実があり、教育上特別な配慮、指導が必要とされる。聴覚障害幼児のコミュニケーション・言語発達を促進する指導法の開発の前提として、そのコミュニケーション行動の実態を解明することが不可欠である。従来、聴覚障害幼児のコミュニケーション行動については、次のような研究がなされてきた。

聴覚障害幼児では、母子相互交渉場面で、健聴幼児に比べて象徴機能の発達が遅れており、この状態での母子相互交渉の不成立度が高く、相互交渉の持続時間は短かった。しかし、年齢の上昇につれて、行為による伝達行動から行為に伴わせてスピーチを用いて伝達する行動に移行しつつあり、不完全な伝達形式を用いて、より効果的に意味伝達を試みる傾向がみられた(長崎, 1982)。言語指導場面では、指導者の伝達行動の関係で、指導者による子供の活動の方向づけや、子供の自発的伝

達行動への働きかけによって、非言語的伝達手段から音声言語を併用する伝達手段に移行し、自発的表現力も芽生えている(浜角, 1983)。また、健聴の母親の方が相互交渉の面で、聾の母親より①受容・拡充機能を持つ言葉によるコミュニケーションを実施している、②子供との合同注意や合同活動を持っている、点で優れているとされている(岩瀬, 1982)。このように、聾児の周囲の人々のコミュニケーション行動の特徴と、聾児のコミュニケーション能力や象徴機能の発達が相互に影響しあうことの重要性が指摘され、少なくとも、聾そのものが積極的な母子相互交渉作用を阻害するのではないと言える(Meadow, K.P., Greenberg, M.T., 1981)。

さらに、聴覚障害幼児のコミュニケーション行動の発達の順序性について、表現内容の種類による“談話”の出現数の差があるものの、数多く出現する内容項目ほどその表示手段はより分化している。そして表示手段も社会化・慣用化傾向が大きくなり、また内容項目間の変遷をみると、叙述的表現・要求的表現ともに、未分化なものからより分化・複雑化した内容のものへと出現数が移っていく傾向がみられる(坂本, 1979)。しかし、要

\* 筑波大学心身障害学研究所

\*\* 筑波大学心身障害学系

求・模倣の出現が健聴児に比べて遅れているという(長澤, 1983)。

以上の研究をふまえて, 本研究は①母子相互交渉における聴覚障害児のコミュニケーション行動の特徴, ②相互交渉における母親のコミュニケーション行動の特徴について1~2歳児を対象に解明することを意図している。

## II. 方法

### 1. 被験児

被験児は, A聾学校において教育相談及び早期教育を受けている1歳及び2歳の聴覚障害幼児(男3名, 女1名, 計4名)である。裸耳の聴力レベルが90dB以上で, 重複障害を併せ持たないものである。なお両親は健聴者である。Table 1に被験児の性別, 聴力レベル, 観察開始時の年齢を示す。

Table 1 対象児一覧

対象児	性別	観察開始時	聴力レベル(裸耳)
A児	男	1歳7ヶ月	98.0db
B児	男	1歳8ヶ月	93.7db
C児	男	2歳7ヶ月	111.5db
D児	女	2歳6ヶ月	94.5db

### 2. 行動記録の方法

A聾学校の教育相談室及び遊び場で, 被験児にワイヤレス・マイクを装置して, 8ミリビデオ・

カメラに録画した。1名に当たり, 1ヶ月に1回, 約2時間録画した。

### 3. 分析場面

各被験児(以下各児と略する)の約2時間の観察場面のうち, 安定した遊びの見られた場面(非習慣的場面)及び, 「名札付け」, 「おやつ」, 及び「お弁当」の時間などの習慣的場面を取り上げ, (1)教師の集団指導場面, 及び(2)母子相互交渉場面を合計約1時間, 分析の対象とした。

### 4. 行動記録の作成と分析

被験児と母親のコミュニケーション行動について, 各発話とこれに随伴する諸行動をVTR録画から書記化する。これらを「自発コミュニケーション行動」(他者への働きかけ行動)と, 「対応コミュニケーション行動」(他者からの働きかけへの行動)に分類し, それぞれの行動を「機能」と「手段」のカテゴリーに基づいて分析を行った。これらのカテゴリーは, 従来の研究を参考に筆者らが検討, 作成した。(カテゴリーについては, 結果の分析の中で示す。)

各児の5分間のVTR録画について, 学生2名が, 独立して行動の記録(書記化)を行い, その一致率をみた。その結果, 両者の一致率は76.2%であった。以後, 学生の記録をもとに筆者が分析をした。

## III. 結果

1. 各児の「自発コミュニケーション行動」について, A児とC児の各手段の月齢別の頻度をそ

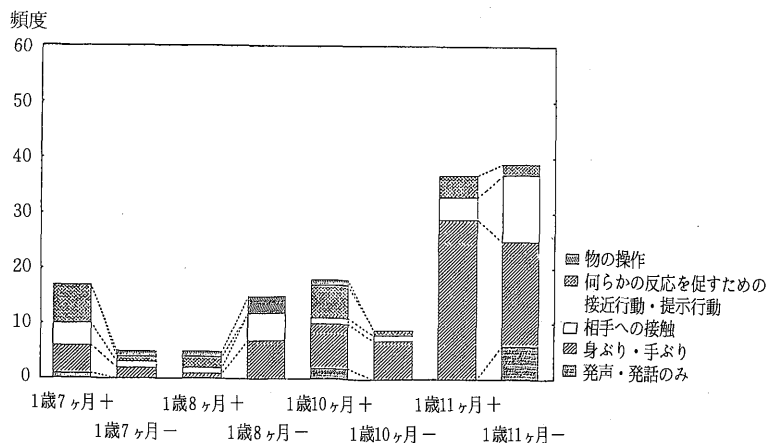


Fig. 1 A児の「自発コミュニケーション行動」の各手段の月齢別の頻度

注 (+) …相手の顔と向かい合う場合

(-) …相手の顔と向かい合わない場合

れぞれFig. 1, Fig. 2に示す。コミュニケーション機能については、以下の通りである。

1) A児(1歳児): Fig. 1より

1歳7ヶ月: ①「対面」の場合、機能では「要求」, 「呼びかけ」, 「肯定的」の順に多く見られた。手段では「身ぶり」, 「相手への接触」, 「接近・提示行動」の順に多くみられた。

②「非対面」の場合、機能では「要求」と「感動」がみられ、手段では「身ぶり」と「相手への接触」と「接近・提示行動」と「物の操作」がみられた。全体的に、「対面」も「非対面」も機能と手段において、2歳児に比べて頻度が少なかった。

③「発声」が伴ったコミュニケーション行動は、みられなかった。

1歳11ヶ月: ①「対面」の場合、機能は「要求」と「報告的」が頻繁にみられ、「相手への接触」, 「接近・提示行動」がわずかながらみられた。

②「非対面」の場合、機能は特に「要求」と「報告的」が多くみられ、「呼びかけ」, 「感動」も次に多くみられた。手段は特に「身ぶり」と「相手への接触」が多く、「発声のみ」と「接近・提示行動」が次に多くみられた。

③「発声」が伴ったコミュニケーション行動は、「要求」又は「報告的」と「身ぶり」, 「感動」と「相手への接触」, 「要求」と「接近・提示行動」の3組であった。

2) B児(1歳児):

1歳8ヶ月: ①「対面」の場合、機能では、「要求」が主で、手段では「身ぶり」が主で、同年齢のA児に比べて、機能、手段とも頻度が非常に少なかった。

②「非対面」の場合、機能では「要求」が主で、手段では「身ぶり」, 「接近・提示行動」がみられた。

③「発声」の伴ったコミュニケーション行動は、みられなかった。

1歳11ヶ月: ①「対面」の場合、機能では新たに「報告的」, 「否定的」, 「感動」がみられ、手段では「身ぶり」と「発声のみ」がみられた。

②「非対面」の場合、機能では新たに「報告的」, 「感動」がみられるようになり、手段では「身ぶり」, 「発声のみ」がみられた。全体的には、「非対面」の方が「対面」より頻度が多くなっている。

2歳: ①「対面」の場合、機能では特に「要求」, 「報告的」が多くみられるようになり、「感動」もみられた。手段では、特に「接近・提示行動」が多くみられ、「身ぶり」, 「発声のみ」, 「物の操作」も次に多くみられた。「身ぶり」では「指さし」が顕著に用いられていた。

②「非対面」の場合、機能も手段も、2歳の「対面」とほぼ同様にみられ、全体的には「対面」の頻度の方が、「非対面」の頻度より多くなっていた。

3) C児(2歳児): Fig. 2より

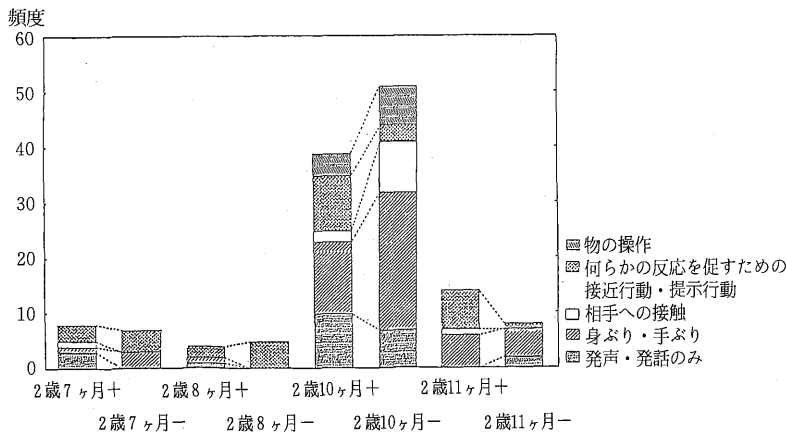


Fig. 2 C児の「自発コミュニケーション行動」の各手段の同齢別の頻度

注 (+) …相手の顔と向かい合う場合

(-) …相手の顔と向かい合わない場合

2歳7ヶ月：①相手の顔と向かい合う場合（以下「対面」と称する）において、機能では「要求」と「感動」、手段では「発話のみ」、「身ぶり」、「相手への接触」、「接近・提示行動」がみられた。

②「非対面」において、機能では「要求」、「報告的」、「その他」、手段では「身ぶり」、「接近・提示行動」がみられた。

③「発声」が伴ったコミュニケーション行動は、「要求」を機能に、「身ぶり」と「接近・提示行動」を手段として用いた時であった。

2歳8ヶ月：①「対面」の場合、2歳7ヶ月の「対面」の場合と類似しているが、相違点は、機能について、「要求」が2歳7ヶ月より少なくなり、手段については「相手への接触」が消滅している。

②「非対面」の場合は、機能では新たに「感動」がみられ、手段では、「接近・提示行動」がみられた。

③「発声」が伴ったコミュニケーション行動は、2歳7ヶ月と同様であったが、新たに「報告的」を機能として用いていた。

2歳11ヶ月：①「対面」の場合、機能では、特に「報告的」が頻繁で、「呼びかけ」と「要求」が次に多くみられ、手段では、特に「身ぶり」と「接近・提示行動」と「相手への接触」が多くみられた。

②「非対面」の場合、機能では、大体2歳11ヶ月と同様であったが、手段は「身ぶり」が2歳11ヶ月と同様に頻繁にみられ、さらに「接近・提示行動」もみられた。

③「発声」が伴ったコミュニケーション行動は、機能では「要求」が殆どで、手段では「身ぶり」と「接近・提示行動」の場合で、2歳7ヶ月以来継続していた。

#### 4) D児（2歳児）：

2歳6ヶ月：①「対面」の場合、機能は「報告的」、「要求」、「感動」の順に多く、手段では「身ぶり」、「相手への接触」、「接近・提示行動」、「発声のみ」の順に多かった。

②「非対面」の場合、機能では「報告的」と「感動」がみられ、手段では「身ぶり」が特に多く、「相手への接触」と「接近・提示行動」が次に多く見られた。

③「発声」が伴ったコミュニケーション行動は、機能では「報告的」が主で、手段では「身ぶり」

と「相手への接触」が主であった。

2歳9ヶ月：①「対面」の場合、機能では、特に「報告的」と「報告」が多く、新たに「否定的」「感動」がみられ、手段では、2歳6ヶ月、2歳7ヶ月に続いて、特に「身ぶり」と「接近行動」が特に多く、「発声のみ」と「物の操作」がわずかしみられなかった。

②「非対面」の場合、機能では「報告的」に加えて「感動」が特に多くみられ、「要求」がわずかしみられなかった。手段では2歳6ヶ月、2歳7ヶ月と同様に「身ぶり」が主にみられ、「発声のみ」、「接近・提示行動」、「物の操作」は、わずかにみられたのみであった。

③「発声」が伴ったコミュニケーション行動は、「報告的」と「身ぶり」、「感動」と「接近・提示行動」の2組であった。

2歳10ヶ月：①「対面」の場合、2歳9ヶ月までと同様に、機能では「報告的」と「要求」が顕著にみられ、新たに「呼びかけ」、「質問的」がみられた。手段では、「身ぶり」が主に用いられていた。

②「非対面」の場合、機能は「報告的」が顕著にみられ、「質問的」がわずかにみられたのみであった。

③「発声」が伴ったコミュニケーション行動は、「報告的」と「身ぶり」、「報告的」と「呼びかけ」、「報告的」と「接近・提示行動」の3組であった。

2. 各児の「対応コミュニケーション行動」について、A児とC児の各手段の月齢別の頻度をそれぞれFig. 3, Fig. 4に示す。機能については下記に述べるとおりである。

#### 1) A児（1歳児）：Fig. 3より

機能について、「対面」の場合、全体を通して殆どが「受容行動」であり、1歳11ヶ月に急増している。「非対面」の場合、「受容行動」は、1歳11ヶ月以外は大体「対面」のそれと同じくらいか或は少し多めであったが、1歳11ヶ月では、「対面」のその1/2位の頻度であった。「無関心行動」は、他の対象児と同様に、「非対面」の約半分以上を占めており、月齢を追うにつれて急増している。

手段について、「対面」の場合と「非対面」の場合の両方に使われているものは、「指さされた人や物に注目」、「身ぶり・手ぶり」、「物を受け取ったり与えたりする行動」、「同調・模倣」であった。

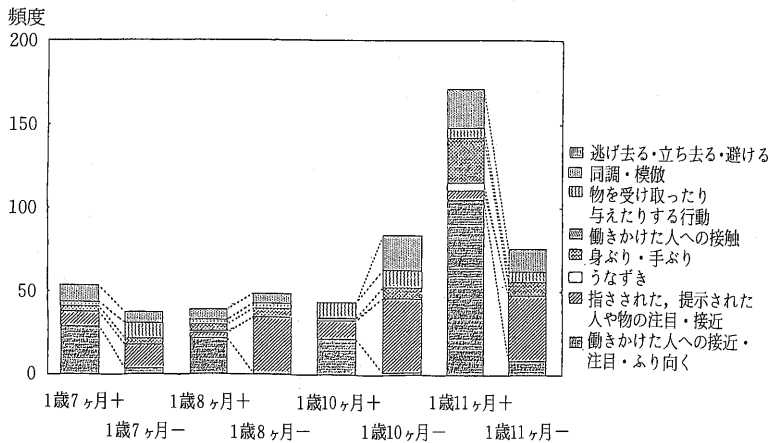


Fig. 3 A児の「対応コミュニケーション行動」の各手段の月齢別の頻度

注1 (+) …相手の顔と向かい合う場合

(-) …相手の顔と向かい合わない場合

注2 「発声・発話のみ」はほとんどないため、省いた

また、全体を通して共通している点をあげてみると、「対面」の場合は「働きかける人への接近・注目」が顕著であり、「非対面」の場合は「指さされた人や物に注目」が特に頻繁にみられたことであった。この点は他の対象児についても同様であった。

さらに、A児は、月齢を追うにつれて、①働きかける人に「顔を向ける」ことが多くなったこと、②周囲の場面への理解が深まってきたこと、③体の動きが活発化してきたことがみられた。それらが原因となって、「その人の身ぶり」の「模倣」をしたり、ある行動を「身ぶり」で表現したり、あるいは「指さし」を使用して「同調・模倣」行動をするという、積極的な対応の態度を顕著に示すようになったことが、1つの大きな特徴であった。

## 2) B児 (1歳児) :

機能について、全体を通して共通していることは、「対面」の場合「受容行動」のみみられ、これが徐々に増加する傾向にあることである。一方、「非対面」の場合は、全体の半分以上を「無関心行動」が占めており、次いで多い順に「受容行動」、「拒否行動」、「従属行動」がみられたことである。ここでも、「無関心行動」と「受容行動」は月齢を追うにつれて徐々に増加する傾向にあった。

手段について、全体を通して共通していることは、「対面」の場合、「働きかける人への接近・注目」、「物を受け取ったり与えたりする行動」、「同

調・模倣」が少しずつみられたことである。「非対面」の場合は、「指さされた人や物に注目」が主に頻繁にみられたことである。これらの点は他の対象児と類似している。

また、「身ぶり・手ぶり」もみられたが、やはり「指さし」が頻繁に使われていた。

1歳11ヶ月以降、身体の動きの活発化が母親とのコミュニケーションの増加をもたらし、その結果、「物を受け取ったり与えたりする行動」、「同調・模倣」の行動の顕著な増加となって表れた。

## 3) C児 (2歳児) : Fig. 4より

機能において全体を通して「対面」の場合は大多数を「受容行動」が占めており、月齢を追うにつれて徐々に増え続けている。「非対面」の場合は、「対面」に比べて全機能の頻度が倍も多く、「受容行動」と「無関心行動」がそれぞれ全体の約50%前後を占めていることが特徴的である。しかし、「受容行動」は、「対面」の場合とは逆に、月齢を追うにつれて減少の傾向がみられる。

手段について、全体を通して共通していることは、「対面」の場合、「指さされた人や物に注目」、「身ぶり・手ぶり」、「同調・模倣」が主にみられたことである。

## 4) D児 (2歳児) :

機能について、「対面」の場合、全体を通して、「受容行動」しかみられず、量的変化は殆どなかった。

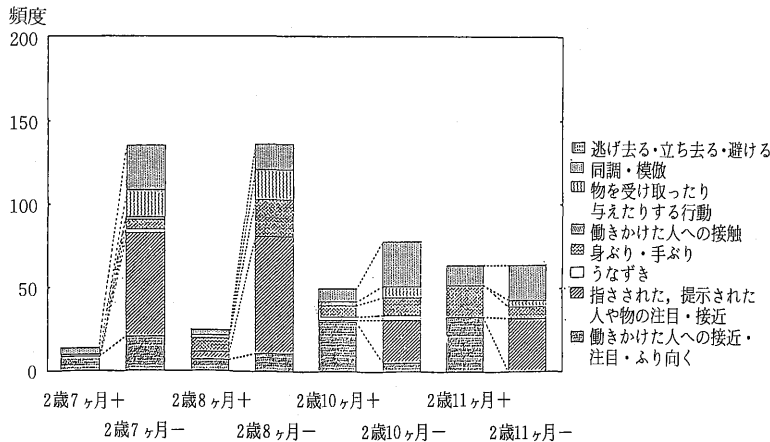


Fig. 4 C児の「対応コミュニケーション行動」の各手段の月齢別の頻度

注1 (+) …相手の顔と向かい合う場合

(-) …相手の顔と向かい合わない場合

注2 「発声・発話のみ」はほとんどないため、省いた

「非対面」の場合は、「受容行動」の頻度が2歳9ヶ月までは「対面」とほぼ同値であったが、2歳10ヶ月になると2倍近く増加している。「従属行動」と「拒否行動」はわずかにみられたが、特に「無関心行動」は、C児と同様に、「受容行動」の2倍以上あり、月齢を追うにつれて急増する傾向がみられた。

手段について、「対面」と「非対面」の両方において、全体を通して「身ぶり」や「物を受け取ったり与えたりする行動」や「同調・模倣」が共通してみられた。「対面」の場合は、さらに、「働きかけた人への接近・注目」が主にみられ、「非対面」の場合は、「指さされた人や物に注目」が主にみられた。

なお、「身ぶり・手ぶり」は、「指さし」が主であったが、月齢を追うにつれて、特に目をひいた対象を「身ぶり」で表現して伝達するようになった。「同調・模倣」は、量的には変わっていないが、量的には、月齢を追うにつれて、周囲の場面への理解が深まり、「対面」、「非対面」に関係なく、周囲の人達の行動に「同調」したり、「模倣」したりするようになってきた。

#### IV. 考 察

前述の結果に基づいて、①個人別にみたコミュニケーション行動特徴、②全般的なコミュニケーション行動特徴について場面、母親などとの関連

から、次に考察をしたい。

#### 1) 個人別にみたコミュニケーション行動特徴

##### ①A児（1歳児）の場合

全体的に、他の対象児と同様に、「対応コミュニケーション行動」の方が「自発コミュニケーション行動」より多かったが、1歳7ヶ月以降になると、両方とも急増していることが特徴であった。

「自発コミュニケーション行動」では、その場の遊びの状況を理解し、これに応じて、自分の気持ちを「身ぶり・手ぶり」で豊かに「要求」や「報告的」にしたり、または「発声」をともなって「感動」を表現したりする点が、A児独特の興味深い行動特徴としてあげられる。

A児の「自発コミュニケーション行動」に対する母親の反応は、①「対面」の態度を確立して、即座に笑顔でうなずいてみせること、②A児の「身ぶり・手ぶり」を「模倣」あるいは「拡大」して、「発声・発話」を併用すること、③A児の表現内容を「発話」で言語化してみせる、という点に、特徴がみられた。

このような母親の積極的な相互交渉行動が、A児の「自発」または「対応コミュニケーション行動」を一層促進した。つまり、A児は月齢を追うにつれて、「対面」と「非対面」の態度が共に増加してみられた。「対面」の場合、特に「働きかける人への接近・注目」、「うなずき」、「身ぶり・手ぶ

り)、「同調・模倣」に「発声」が伴ってみられるようになった。ここに、母親の積極的な「対面」の態度で「発声・発話」を伴ったコミュニケーション行動を特徴とする母子相互交渉の影響が裏付けられる。

#### ②B児(1歳児)の場合

全体的に、他の対象児に比べてコミュニケーション行動が非常に少なかった。特に「自発コミュニケーション行動」が著しく少なかった。B児は、同年齢のA児に比べて身体の運動の面が遅れており、座りこみでの傍観行動が顕著にみられた。1歳11ヶ月頃から次第に活発に動きまわるようになってくると、母親のB児への積極的な働きかけが急増し、B児の「対応コミュニケーション行動」を促すようになった。しかし、母親の「非対面」の態度が依然として多かったことが、B児の「無関心行動」を多くもたらしたといえるであろう。その一方、B児の「自発コミュニケーション行動」については、手足の運動の活発化に伴って、まず、「指さし」による「要求」の表現がみられ、さらに働きかけた人に頻繁に「対面」するような行動に発展した。機能は「報告的」、「感動」に拡充し、手段も「相手への接近・提示行動」、「物の操作」、「発声のみ」へと増加した。

こうしたB児の「自発コミュニケーション行動」の増加が、母親のコミュニケーション行動を刺激した。しかし、母親はB児の「指さし」を模倣するにとどまり、自ら「身ぶり・手ぶり」を伴わず、「発声・発話のみ」が主であった。

このように、B児の身体運動の発達に伴う「自発」と「対応」の両方のコミュニケーション行動の質的、量的増加が、母親の積極的な働きかけを生起し、母子相互交渉作用の様相が質量ともに深化、拡充する原因となったと考えられる。

しかし、母親のコミュニケーション行動の手段の貧弱な点が、B児のコミュニケーション行動の発展を制約しているのではないかと推察される。

#### ③C児(2歳児)について

2歳7ヶ月、2歳8ヶ月頃は、同年齢のD児と比べて、「自発コミュニケーション行動」が非常に少なかった。これは特に目的もなくフラッと動きまわる、孤立行動が顕著なためであった。当時の母親は、C児と「対面」してコミュニケーションをしようとする態度を意図的にとらずに、C児を「追いかけて」懸命に「指さし」することを主な

手段とした。機能は「要求」と「報告的」が多くみられた。このことのため、母親の「コミュニケーション意図」がC児に十分伝わらないことが多く、前記の母親の「指さし」などの働きかけにもかかわらず、C児の「対面」した「自発コミュニケーション行動」と「対応コミュニケーション行動」の生起はあまりみられなかったと考えられる。

2歳10ヶ月になると、教師の母親への指導で、母親は、C児と「対面」するように努力をし、そのためにフラッと動きまわるC児の「体の一部をひっぱって」、「注意を向けさせる」手段を用いた。その結果、C児も、自ら進んで対面して、「自発コミュニケーション行動」をするようになってきた。つまり、成人とC児の「対面」によって、確実に「コミュニケーション意図」が伝わることによって、C児の「自発コミュニケーション行動」と「対応コミュニケーション行動」の両方が着実に増加した。そして、「感動」や「喜び」を伝える感情的なやりとりも刺激されて、よりコミュニケーションが豊かになってきたと言える。

こうしたC児のコミュニケーション行動が母親のコミュニケーション行動の質的、量的な側面に積極的な結果をもたらしたと言える。さらに、その場の状況の説明を意図としたコミュニケーション行動を母親が工夫すれば、C児の周りの場面への理解能力や知的能力等に好影響がもたらされると考えられる。

#### ④D児(2歳児)について

全体を通して、「自発コミュニケーション行動」の方が「対応コミュニケーション行動」よりも少なかったが、前者は月齢を追うにつれて増加の傾向をみせ、質的にも量的にも豊かになっていった。D児は、「相手への接触」、「相手への接近・提示行動」、「物の操作」を使用したことが1つの特徴であった。母親のコミュニケーション行動もこれに類似していた。しかし、母親は「対面」した時に、「身ぶり・手ぶり」と「発声」を手段として用いて、コミュニケーションを成立させようと意図するようになった。このことが、D児の、様々な場面の理解が深まるにつれて、他の友達と積極的に同じ遊びに参加しようとする「同調行動」が生起し、その遊びを継続するために他人と自ら進んで「対面」し、「身ぶり・手ぶり」を主な手段として「報告」的に訴えたり、あるいは要求したりする「自発コミュニケーション行動」をするように

なったためと考察された。

「対応コミュニケーション行動」については、母親は、特に「非対面」で「指さし」を頻繁に用いていたために、D児が「気づかない」現象が顕著であった。しかし、母親は後の教師の指導で、D児の「体の一部を叩いたりひっぱったり」して「注意喚起」を行い、「対面」の状態「指さし」、「身ぶり」などで、その場の状況を「報告的」に説明したり、「他の子供と同調するように」働きかけたりするようになってきた。するとD児も「対面」で母親の模倣も含めて、「身ぶり・手ぶり」の他に「働きかける人への接近・注目」を用いるようになってきた。

このように、D児は、「対面」をより頻繁に用いた母親のコミュニケーション行動を積極的に観察・模倣することによって、「自発」と「対応」の両方のコミュニケーション行動を、質的、量的に豊かにしていったと考えられる。

以上の、各児のコミュニケーション行動の発達の様相において、周囲の場面の理解が深まるにつれて、子供が積極的に成人に何らかの手段で、「報告的」、「要求」を機能として働きかけ、成人と相互に交渉することを刺激することによって、当児の、前言語的伝達能力をより発展させて、言語的伝達能力への土台を築いていく、過渡期にあると考えられる。

今後は、こうした、前言語期にある子供が、周囲の認知、社会性、及び対人的コンテクストの中で前言語または言語を意味あるものとして運用する能力が発展していくもの(Bruner, J.S., 1975)と予想される。

## 2) 一般的なコミュニケーション行動特徴

1～2歳の聴覚障害幼児のコミュニケーション行動の一般的な特徴として次の事項をあげることができる。

①「自発コミュニケーション行動」において、「要求」と「報告的」を主な機能に、「身ぶり・手ぶり」と「相手への接触」と「相手への接近・提示行動」を主な手段に用いており、「発話」はみられず、「発声」が伴っていた。

②「対応コミュニケーション行動」において、「非対面」の方が「対面」より多い点や、「対面」の場合は、機能は「受容」で、手段は「働きかける人への接近・注目」が一番多く、「指さされた人や物に注目」「身ぶり・手ぶり」が次に多くみられ

た点、「非対面」の場合は、機能の半分以上を「無関心」が占めており、手段は「指さされた人や物に注目」が主に用いられた。

③「自発」と「対応」の両方に用いられた「身ぶり・手ぶり」では「指さし」が一番頻繁にみられた。

④特に1歳児において、運動の面の発達によって活発になると、

a) 1歳児では、周りの人や物に対する興味が拡大し、「自発コミュニケーション行動」が盛んとなり、

b) それが母親の働きかけ行動を刺激し、促進させ、

c) a)とc)が相互に関係しあって、相互交渉作用の質と量の両側面を豊かに拡充させた。

なお、①母親が子供との「対面」しようと意図的に行動するかどうか、②場面に応じたコミュニケーションを成立させようとして手段などにおいても豊かに工夫をしているかどうか、ということが、各児の以上の行動特徴に影響すると考えられる。

今後、さらに3歳児のコミュニケーション行動の検討を加えるとともに、聴覚障害幼児のコミュニケーション行動を縦断的、横断的に詳細に研究していくことが課題として設定される。

謝辞

この論文を作成するにあたり、筑波大学附属聾学校幼稚部、富田香織先生、後藤まさ子先生、藤浪武都子先生、大井俊弘先生の御協力、御助言を戴きました。ここに深く感謝いたします。

## 文 献

- 1) Bruner, J.S. (1975): The Ontogenesis of speech acts. *Journal of Child Language*, 2, 1-19.
- 2) 藤田継道(1983): 重度精神遅滞児及び自閉症児の教室におけるサイン言語の研究. 手指法の評価と適応に関する研究, 特別研究報告書, 国立特殊教育総合研究所, 39-49.
- 3) 浜角典子(1983): 言語指導場面における聴覚障害乳幼児の伝達行動の分析. 筑波大学教育研究科修士論文.
- 4) 岩瀬泰子(1982): ろう幼児の言語記号化行動の獲得過程—母親がろう者と健聴者である2歳児の母子相互交渉場面における比較研究. 筑波大学教育研究科修士論文.



- 5) Meadow, K.P., Greenberg, M.T., et al. (1981): Interactions of Deaf Preschool Children: Comparisons with Three Other Groups of Deaf and Hearing Dyads. *American Annals of the Deaf*, 126(4), 454-468.
- 6) 村田孝次(1984): 日本の言語発達研究, 培風館.
- 7) 長崎裕子(1982): 2歳代聾児の操作行動と母子相互交渉の発達. 筑波大学教育研究科修士論文.
- 8) 長澤泰子(1983): 聴覚障害乳幼児の発達の観点から(-)コミュニケーション行動の発達. 手指法の評価と適応に関する研究, 特別研究報告書第2章, 国立特殊教育総合研究所, 85-90.
- 9) 大石益男(1986): 精神薄弱児の言語機能獲得過程の分析. 聾児, 聾精神薄弱児等の言語習得と多様なコミュニケーションの応用に関する研究, 特別研究報告書, 国立特殊教育総合研究所, 79-86.
- 10) 坂本幸(1977): 高度聴覚障害幼児の身振り語一集団実験保育の行動観察による検討. 日本手話学術研究論文集, 1, 1-7.
- 11) 辰野俊子, 斉藤こずえ, 武井澄江, 萩野美佐子, 大浜幾久子(1979): 言語行動の発達(II)一玩具を媒介とした母子相互作用(2から17か月児の疑似縦断資料の分析)一. 東京大学教育学部紀要, 19, 34-37.
- 12) 辰野俊子, 斉藤こずえ, 武井澄江, 萩野美佐子, 大浜幾久子(1982): 言語行動の発達(V)一母子相互作用における指さしと言語の機能一. 東京大学教育学部紀要, 20, 43-59.
- 13) 辰野俊子, 斉藤こずえ, 武井澄江, 萩野美佐子, 大浜幾久子(1983): 言語行動の発達(VI)一子どもの指さし行動の発達と母親の応答行動(9から30か月児の縦断観察資料の分析)一. 東京大学教育学部紀要, 23, 127-140.
- 14) 辰野俊子, 斉藤こずえ, 武井澄江, 萩野美佐子, 大浜幾久子(1984): 言語行動の発達(VII)一母子相互作用における動作と言語(生後3年間の縦断観察資料の分析)一. 東京大学教育学部紀要, 24, 61-80.
- 15) 上田正俊(1979): コミュニケーション行動の形成過程一身振りサインの習得形成を中心にして一. 聴覚障害, 34, 21-26.

## Summary

### A Study on the Development of Communication Behavior of the Young Deaf Children

Waka Fujita      Sinro Kusanagi

The purpose of the present study was to analyze the developmental behavior of the "spontaneous communication" and the "respondent communication" in four young deaf children. Two of them were one year old and the other were two years old.

The results were as follows:

- 1) Each subject showed a variety of the characteristics in the aspects of the "communication function" and "expressive mode".
- 2) But several aspects were common to all of four subjects.

For example,

(1) In the "spontaneous communication", the major "communication function" which all subjects used were "requirement" and "description", and the major "expressive mode" were "gesture", "contact with others", and "approach and/or presentation to others". "Speech" was not observed, but "vocalization" was observed with one or more "expressive mode".

(2) In the "respondent communication", "non-eye-contact" was always more frequent than "eye-contact". In "eye-contact", the "communication function" used by all subjects was "reception". Then "expressive mode" were ① "approach and paying attention to the speaker" which was frequently observed, ② "paying attention to the pointed person or object" and "gesture" which were observed less frequently than the former. In "non-eye-contact", the major "communication function" was "indifference", and the major "expressive mode" was "paying attention to the pointed person or object".

(3) In "gesture", "pointing" was used most frequently with both the "spontaneous communication" and the "respondent communication". We considered that these behavior characteristics were due to hearing-impairments. And other factors contributing to these behavior characteristics might be,

- 1) Analyzed scenes were mostly of a group direction.
- 2) As one year-old subjects developed, especially in the motor skill, they gradually became active, and they showed more interest in the persons and objects in his/her surroundings. These behaviors stimulated their mothers and promoted their interactive communication. These behaviors were related with each other, and they made quality and quantity of mutual interaction more richer.

Such results suggested it would be important to consider mothers' aspects of quality and quantity of communication behavior in the mutual interaction between them and their children,

and how to make the “expressive mode” more appropriate and rich.

**Key Word** : young deaf children, communication, communication function, mode, mutual interaction